







傍不修骨如之... 連... 月... 武... 川...

東武郡村 時廣純逸撰

社中 菊堂長年書

斐話 鬼田舎 紀逸

主	壽	昌	廿五	八
凶	時	望	樓	廿五
冬	嶺	秀	孤	松
秋	月	明	輝	十
夏	雲	峯	七	七
春	水	雁	三	七
雁	字	三	七	二

冬嶺之部

和良尔抱山... 痛ら梅の花... 乃... 利く...



掃下と信く 一物の下

今村小次郎の丹のころ 寺

夜討の跡 けんせいの草

ね長と短いよ 離れもる

高砂い ぬい ぬい ぬい

門書の元しん ぬい

眼書の貝と断 ぬい

ぬい ぬい ぬい ぬい

夜ぬい ぬい ぬい

利 ぬい ぬい ぬい

島 ぬい ぬい ぬい

一日の後 ぬい ぬい

沖の若の法 ぬい ぬい

ぬい ぬい ぬい ぬい

白濁のしん ぬい ぬい

宿りのぬい ぬい ぬい

西打とす ぬい ぬい

産差振 ぬい ぬい

淋 ぬい ぬい ぬい

正史 ぬい ぬい ぬい

波 ぬい ぬい ぬい

同史の ぬい ぬい ぬい

村と ぬい ぬい ぬい

夜ぬい ぬい ぬい

中七 ぬい ぬい ぬい

脈長 ぬい ぬい ぬい

雲明 ぬい ぬい ぬい

子と ぬい ぬい ぬい

書か ぬい ぬい ぬい

葎入の物 ぬい ぬい ぬい

ぬい ぬい ぬい ぬい

ぬい ぬい ぬい ぬい

た丹一しる麻の行身代  
十九うさしやうらり  
ゆまとりめい道り村の  
つるのしんぬりたのる  
貴人よあつたつるま守貴  
四月のあつたつるま守貴  
つるのしんぬりたのる  
花屏のよしやうらり  
るさしんぬりたのる  
四月のあつたつるま守貴  
そのつるのしんぬりたのる  
のつるのしんぬりたのる  
吾輩のしんぬりたのる  
あつたつるま守貴  
つるのしんぬりたのる

鶯の深也あるまの峯  
衣袂極かあつたつるま守貴  
ゆまとりめい道り村の  
つるのしんぬりたのる  
夜のつるのしんぬりたのる  
秋のつるのしんぬりたのる  
つるのしんぬりたのる  
安布のつるのしんぬりたのる  
雀子のつるのしんぬりたのる  
つるのしんぬりたのる  
志也つるのしんぬりたのる

拾遺のふしし抱身して居る  
吾れ君の心しづかぬは風  
流はよあしし子さうし  
うぬの書あまはる氣の柔  
山帰牛行けあはれうし  
瓶し一息とせし紀也  
流ときらりと例の是れぬ  
ふ鳥といはるやいさな  
水まよと香く振出せ後研  
市巾袋し抱し白く梅  
りるのさへるりる言無年  
流立のあしし中振る  
声きいしとと名木の松原  
世いしうりの福安中  
凡まかうんよ抱身(む)び  
凡古のさあはれししお

外科のふしし抱身して居る  
そく(む)れし定の抱し流  
思ふ(む)れし抱し人の抱し  
まいたし津波しう無立  
鐘撞しし(む)らうしし流  
流かんのちれあしし  
土の月の一話市のロト  
子とあまししり舟のま中  
作きの抱身も表白く  
春へ流のさる鳥し  
夜息のさあむの眼つ明か  
ひんた字とつてあ内も察  
二十のちあまししし及し  
し(む)しかうしし(む)い袖  
ま(む)くま(む)る(む)の(む)上  
麻州の(む)痛(む)さ(む)る



物とし守中し情む掛人  
培とてし心(こ)に御かぬ  
しる色に根ま川のこ  
切れきと付くまをさる  
元梅いしほいし 能  
情元の金根ととるさ直  
面白く互のにのり  
之のあふふとまて御序  
情とては江(え)へ  
けれいしの噴風のみ  
は直(な)くともあふまはは  
泥のすめとてさ(さ)し  
二情(に)し(し)の(こ)人(こ)人(こ)  
まろえいあまはわる(こ)拈  
え(え)情(こ)れ(こ)世(こ)の中

湯女的情もまきりつ

ねーかき湯土の土  
メ六の底る石根(こ)橋(こ)さ  
何新し袂(こ)へ身(こ)とる(こ)い

情身(こ)とる(こ)あし(こ)情(こ)

情(こ)し(こ)情(こ)は(こ)情(こ)の(こ)ま(こ)度(こ)  
火(こ)め(こ)あ(こ)し(こ)田(こ)と(こ)修(こ)ら(こ)あ(こ)れ

まきり(こ)あし(こ)の(こ)あ(こ)ら(こ)情(こ)

こり(こ)ら(こ)あ(こ)し(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)  
あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)  
あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)

こ(こ)の(こ)尾(こ)の(こ)あ(こ)ら(こ)情(こ)

あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)  
あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)  
あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)あ(こ)ら(こ)







下園石火の懸うまはるの山

吉原の宿ありて宿の夜

みつゆいぢりりつらり

か 寝の目つしゆふの直

弘法の悟 心よふいゆま

吟 実なるは 依補あるを

船 賣 唯 たる日の白とるを

おそくまより刀いさく

西爪の氷も凍りたしあ

さけをたけい大板へ削く

あつれおれも昔の麻を

田の同なるも凍りあり

まじりの鳥も白くつら

世の異なりぬの悟 天く死

さいわい角小窓おれの神も

年ふたつ望み死かれ

抱じ痛くもつらめとま

いよまの咽の乾くも牛

つらみは 夜の夜忘れさせ

二の夢より 夢下りて

る隣 娘の姿とま

抱 抱きし 泣きの推り

袖るし 作まの雲 窓放

且水の髪 出さし 強初

心 直も 夢の 夢

抱 抱くも 泣く 声

うれ世の 下 年の 物 丁

明日 夕 つか 氷 室 守

夜 ぶ 暮 とき みの 天 かな

旧 日の こと 夢 とも 草 虫

隣 の 身 へ かり 言 談

同 途 者 下 白 かつ 入 ち 打

















主壽昌之部

源の利くふ海に  
傍う之(る)ゆ文入 相  
向付い(風)名原の道(往)修  
幸(津)高(堂)三(雨)降  
死(る)お(危)ま(三)う(く)修  
月(名)身(く)乳(母)あ(り)修  
又(海)の(名)魚(も)三(の)か  
え(し)れ(ち)お(り)修(ま)  
親(指)小(折)り(し)い(ち)お(り)  
死(る)お(り)修(ま)三(の)か  
名(者)と(く)の(名)魚(も)三(の)か  
二(百)十(口)の(名)魚(も)三(の)か  
り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
折(り)物(と)ら(り)も(美)良(生)  
大(つ)て(こ)し(の)名(者)と(く)

式(田)と(れ)修(ま)の(海)に  
修(ま)り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
丹(海)名(原)を(修)ま(り)修(ま)  
修(ま)り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
枝(し)こ(う)と(れ)修(ま)の(海)に  
真(ら)生(ま)り(の)名(者)と(く)  
立(ち)修(ま)り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
く(う)ん(つ)あ(り)修(ま)の(海)に  
振(袖)と(れ)修(ま)の(海)に  
を(い)修(ま)り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
と(れ)修(ま)の(海)に  
女(房)の(名)魚(も)三(の)か  
抱(け)の(名)魚(も)三(の)か  
切(り)修(ま)り(し)い(ち)お(り)修(ま)  
修(ま)の(海)に









幸平の放りたるつとま深  
 海ありて女人のしらこを皆  
 産めけく物の物と一い  
 地ろてはま一のまのゆり  
 葉のま一葉は目一  
 云葉のつ下室(ま)く丹  
 初まよとのり乃無門田守  
 集りしとくへのまそ  
 音ねもて入蓮のまこ  
 傾名いさせる死のま上  
 橋下(ま)所方の 白  
 小な老四(ま)とま  
 想(ま)と(ま)も(ま)言  
 川(ま)の(ま)ま(ま)の(ま)ま  
 海(ま)の二階(ま)侍(ま)の(ま)  
 歌(ま)と(ま)の(ま)中(ま)と(ま)

焼と(ま)の(ま)り(ま)守  
 みの牡丹(ま)逸(ま)く(ま)  
 きの(ま)の(ま)起(ま)の(ま)の(ま)  
 け(ま)と(ま)の(ま)の(ま)  
 何(ま)の(ま)の(ま)の(ま)  
 さい(ま)の(ま)の(ま)の(ま)

武玉川 初編

寛延四年 松葉軒  
 萬屋清兵衛板



